



CLT理論に基づく指導法の体験習得を目指して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 大学英語教育学会 公開日: 2020-06-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊勢野, 薫, Ise, Kaoru メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/5147

英語科教育演習
—CLTの体験習得を目指して—

Pedagogy of TEFL

-Experiential Learning of Teaching Techniques Based
on Communicative Language Teaching (CLT)-

宮崎大学 伊勢野 薫

宮崎大学の伊勢野です。本日は実践報告ということで、宮崎大学での教員養成課程での取り組みをご紹介します。

コンテキスト

- 1 講義： 英語科教育演習IV「教科または教職に関する科目」
3年後期 選択2単位 毎火曜日第3限 1:00～2:30
- 2 受講生： 教育文化学部3年生 6人、現職教員 1人、合計7人
- 3 教室： 稼働式机・椅子、オーディオ設備、DVDおよびVTR設備、
空調
- 4 座席配置： 60人収容の教室の中央部分に長方形に配置
- 5 特徴： 初等教育主専攻英語副専攻、中学文系英語主専攻、
現職教員からなる多様な集団

この実践報告の対象となる講義の概要を説明します。

この講義は教職課程の中の「教科または教職に関する科目」に属する選択科目です。開講時期は3年後期で、週一回の講義で単位数は2単位です。受講生は教育文化学部3年生6人と、現職の教員研究生1人の計7人です。

教室は移動式机・いすが配備され、オーディオ設備やDVD、VTRなどの教育支援機器も整備されています。

教室の収容人数は60人なので、授業の前に机を移動させて、教室の中央に長方形の座席配置をしました。

受講生は初等教育主専攻英語副専攻の学生、中学文系英語主専攻の学生と、現職の中学校教員からなる多様な集団であるという特徴があります。

この講義の目的

ポスト・メソッドにむけての授業力の育成：独自の「言語観」「学び観」「教授観」の形成

“Teacher educators can preach, but they CANNOT teach.”

「理論と実践の融合」モデルの提示

- 1 経験的学習サイクルの枠組みの中での英語教授法の体験習得
- 2 授業のデータ収集・分析とリフレクションの体験習得

次にこの講義の目的を説明します。一言でいいますとポスト・メソッド時代にむけての授業力を育成することになります。

英語教授法は時代とともに変遷を遂げてきましたが、それぞれの教授法は独自の「言語観」「学び観」「教授観」に基づいております。これからの英語教師に求められるのは、これらの教授法の理念を実際の教育現場での状況に合わせて授業を組み立てていく、ポスト・メソッドの授業力であるといえます。そのためには養成段階で各教授法の体験学習を積み、将来教職に就いた時に自分の教育現場に対応できるような授業デザインをするための、独自の「言語観」「学び観」「教授観」を身につける必要があります。

養成段階での教授訓練不足にはいろいろな要素が考えられますが、そのなかでも教師教育に係る大学教員の指導力が問題であります。よく

“Teacher educators cannot teach what they preach.”

と言われるますが、大学教員は、各教授法についての歴史や概要を説明できても、それを養成段階の学生に対して「理論と実践の融合」としてモデルを提示し、学生に体験させることをしてこなかった(またはできなかった)ことが、英語教育の改善を妨げてきたといえます。文科省も現職研修には力を入れているようですが、こと英語教育に関しては養成段階での研修は各大学まかせであるといえます。

このような認識に基づき、養成段階の学生に、経験的学習サイクルの枠組みの中で英語教授法の理論の学習とその実践を体験習得させるということと、模擬授業とデータ収集・分析によるリフレクションの体験習得をこの講義の目的としました。

この講義の内容

Communicative Language Teaching (CLT) 指導法の 体験習得

第1期 Classic Communicative Language Teaching (CCLT)

従来のCLT活動の体験

- a) Jigsaw activities
- b) Information-gap activities
- c) Role plays
- d) Problem-solving activities

次にこの講義で扱ったCLTの内容を説明します。

15回の講義を4期に分け、第1期ではここにあるような古典的なCLT活動をまず体験させることにしました。

Current Communicative Language Teaching 現代のCLT活動の体験学習

第2期 Content-Based Instruction (CBI)
(教科内容中心教授法)

第3期 Task-Based Instruction (TBI) based on
Cooperative Learning Principles
(協働学習理論に基づくタスク中心教授法)

第4期 Mini Lecture for Material Development and
Presentation
(教材開発とプレゼンテーションのためのミニ・レク
チャー)

第2期から第4期は現代のCLTの体験学習を目指し、第2期はCBI、第3期はTBI、第4期はミニレクチャーによる教材開発とプレゼンテーションを習得目標にしました。

なおCBIやTBIについては、定義や内容などに統一された見解はいまだに確立されてはいませんが、ここではCBIを教科内容中心教授法、TBIはCBIに具体的なプロダクトを完成させるものを目的とするものとしておきます。

CLTの基本理念：

Learn to communicate by communicating

コミュニケーションの目的： 対話者の「ライフ・ストーリー」に直接関係する意味を探る

- ・意味と目的（Meaningful and Purposeful）
- ・学習者のInvestmentを促進する

うまくいくCLT活動＝学習者が「学び」を実感する活動

「言語観」「教授観」「学び観」に基づいた指導技術

CLTの基本理念はコミュニケーションを通してコミュニケーション能力を獲得するという点にあります。人はなぜコミュニケーションをするかといえば、そのコミュニケーションがその人のライフ・ストーリーに直接かかわる意味があり、その意味を明らかにするという目的があるからです。したがって教室のコミュニケーション活動もできるだけ学習者にとって意味と目的が感じられるものでなければなりません。そのような活動により学習者のInvestmentも高まるといえます。

もっと簡単に説明しますと、うまくいくCLT活動では学習者が本能的に「意味と目的」を感じ取り、「学び」を実感できるものでなければなりません。そのためには教師自身しっかりと「言語観」「教授観」「学び観」を形成し、それを実現するための指導技術を習得していく必要があります。

教室でのCLT実践

問題点 1 Authenticity (真性)

真性: Authenticity

Arbitrariness: 恣意性



AA-Continuum

「真性」実現のための教師の授業力

さきほど「練習のための練習ではなく実践のための練習」と言いましたが、この目的を教室で実現しようとするには2つの問題点があります。

一つ目は活動をいかにAuthenticなものにするかということになります。教科書等に提供されているCLT活動は、対象が広く教科書使用者全般であるため、どうしても「架空」の状況という恣意性があるのは避けられません。

そこでこのようなCLT活動を学習者にとってAuthenticなものにしていく教師の授業力が問われることとなります。

ここに「真性と恣意性」の連続体がありますが、常に「真性」ということを意識し、教室での活動を組み立てる必要があります。

問題点2 認知能力と言語能力

ディレンマ： 認知能力と言語能力の乖離

認知能力 > 言語能力

限られた英語力でいかにして知的好奇心を刺激できる題材を提供するか

次に問題となるのが学習者の認知能力と言語能力の乖離です。英語の場合はとくにこの問題が顕著になります。中学高校の教科書やその他の英語教材などをみても、生徒の言語能力が限られているため、どうしても内容が「幼稚」なものになりがちです。つまり内容が「真性」ではない場合が多く、生徒は「練習のための練習」を繰り返すことになりがちです。

英語の教科書編集でもいちばんの悩みが、「知的好奇心」をどのように刺激するかということにあります。

母語である日本語では、はるかに抽象的な概念まで学習できるが、外国語である英語では同じような水準での授業は実現が難しいのは事実です。ここでも教師が学習者の認知能力を常に意識して授業を進めていけば、外国語である英語でも、より高度な内容の授業を実践できると思います。

この講義の具体的目標

目標： 養成課程の学生が、自分の言語能力と認知能力に応じた、「真性」のCLTを実体験する

講義テーマ：異文化接触におけるコンフリクト・マネジメント

Rationale

教室はそれぞれ異なった文化背景をもつ学習者集団である。

コンフリクト・マネジメントやDIEのスキル

そして、このような2つの問題を解決するための訓練として、受講生の言語能力の範囲内で、できるだけ彼らの認知能力を発揮できるような「真性」のCLTを体験させることを、講義の具体的目標にしました。

テーマとして、異文化接触におけるコンフリクト・マネジメントを取り上げました。このテーマを選んだのは、教室は異なった文化背景を持つ学習者の集団であり、異文化接触のコンフリクト・マネジメントやDIEの理念や手法は、教室での指導に役立つと考えた故であります。

このテーマにそって種々のCLT活動を体験学習させることにしました。教員志望の学生に「真性」のCLT活動を体験させることで、将来、自分の授業で「真性」を実現できるように願っています。

CLT体験習得をめざす授業の展開

第1期 Classic Communicative Language Teaching

- 1 それぞれの活動の理論的根拠の学習
- 2 ビデオによる模範的授業展開の観察
- 3 教師によるデモ授業と理論の実践の融合モデルの提示
- 4 理論に基づく具体的指導案の作成
- 5 模擬授業の実践とリフレクション

次にこの講義の展開を簡単に紹介します。

まず第1期の古典的コミュニケーション活動の授業の流れです。3回の講義で第1期をカバーしました。

第2期 Content-Based Instruction (CBI)

- 1 異文化接触における摩擦のケーススタディー
- 2 リライトによるストーリーの作成
- 3 プレゼンテーションと摩擦の原因に関する問題提議
- 4 グループ討論によるリフレクション
- 5 授業者はビデオ書き起こしとジャーナルなどをもとに授業改善案を作成

第2期の展開はこのようになっております。時間があれば後ほど学生の作成したプレゼンテーションをご紹介します。第2期以降はそれぞれ4回の講義で、カバーしました。

第3期 Task-Based Instruction (TBI) based on Cooperative Learning Principles

- 1 異文化接触における摩擦のケーススタディー
- 2 ペアおよび小グループによる寸劇の作成:
シナリオ、ビジュアル等の作成
- 3 寸劇によるコンフリクトの提示と問題提議
- 4 グループ討論とリフレクション
- 5 授業者はビデオ書き起こしとジャーナルなどをもとに改善案を作成

第3期のTBIでは、異文化接触のケースから、ペアまたは3人組の協働学習グループでシナリオを作成し、それを演じるという形で、異文化接触の問題提議をし、全体討論を実施しました。

第4期 Mini Lecture * for Material Development and Presentation

- 1 指導目標の設定
ミニ講義の内容と指導手順の決定
- 2 1回目のミニレクチャーと集団討論
- 3 2回目のミニレクチャーと集団討論
- 4 What, How, Whyに関する自分の理論と実践の検討

*Gebhard, J.G. & R. Oprandy 1999. *Language Teaching Awareness*. Cambridge UP

第4期のミニレクチャーは、ゲパード、オプランディー(1999)を参考に、ミニレクチャーを体験学習させました。その内容は自分の特技を伝えるという形式のミニレクチャーを2回実施し、指導目標の設定、教材開発、指導手順の決定、事後省察といった一連の体験をさせました。

ミニレクチャーの内容

- 1 「福笑い」を通して学ぶ日本文化
- 2 「ひな祭り」の伝統的知識に関するクイズ
- 3 中国語の漢字で表されるものについてのクイズと発音練習
- 4 折り紙を使った「パクパク人形」の制作
- 5 2枚の絵の間違い探し
- 6 飛び出し細工のついたバレンタイデー用のカード製作
- 7 鹿児島弁の紹介とカード当てゲーム

2回目のミニ・レクチャーのタイトルを挙げてみます。

この講義に対する受講生のフィードバック

1 大学FD委員会によるアンケート: 総合評価4点満点中4点

2 受講生の声

- ー現場に戻ったらぜひall Englishを意識しながら仕事をしたいと思った。
- ー10分間のpeer teachingをリフレクションすることはこれからの自分に大切なことになると思います。
- ー毎回の授業で英語力も授業力もついたと思います。
- ーいろいろな活動を体験できてよかったです。

この講義を総括してみますと、CLTの体験学習という目標は達成できたと考えています。模擬授業を重ねるうちに、こちらが思いもよらなかったような創意工夫に富んだ活動を考案し、それとともに授業観察眼も格段に進歩したように思います。今年度の後期もまたテーマを変えて実践していこうと考えております。

最後に授業アンケートですが、本学のFD委員会の実施した授業評価では4点満点で4点の評価をもらいました。また個人的に記述してもらったアンケートでも、高い評価をもらいました。

今後の研究課題としては、今回取り上げた中等教育でのCLT活動をより範囲を広げ、初等教育から高等教育にまで広げていきたいと考えております。

A Packed Lunch

An American Boy in
Japanese Elementary School

This is a story of an American family living in Japan.

An American Family

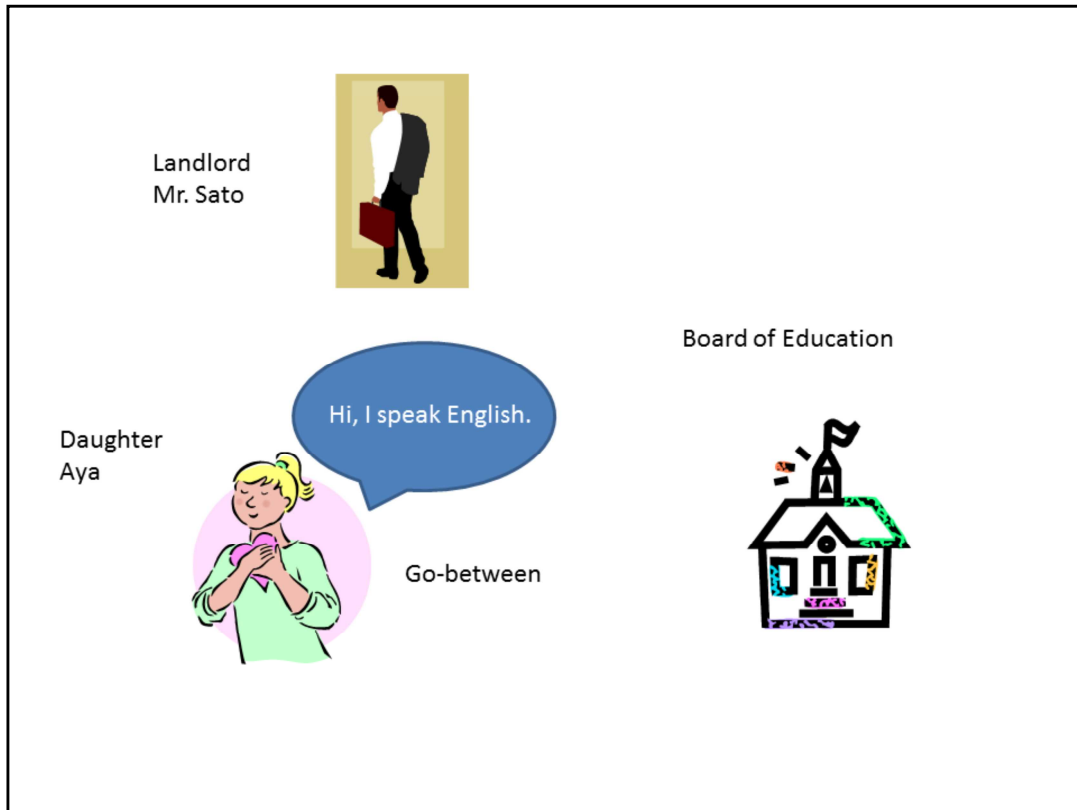


Mr. & Mrs. Jones, Tom, Peter, Paul

Tokyo Branch Office

This is Mr. Jones and his wife Sherry, with their three sons, Tom, Peter, and Paul. Mr. Jones is working in Tokyo branch office of an American company, and he will be working in Japan for the next two years.

There is an American school in Tokyo area, but the Jones' decided to send their eldest son Tom to a Japanese elementary school.



So, Mr. Jones talked to the landlord Mr. Sato and asked him for his help. Fortunately, Mr. Sato's daughter Aya had studied in the USA and she speaks very good English. So, she will be a go-between to negotiate Tom's case with a local board of education.

Japanese Elementary School

4th grade



Tom 10-year-old

Ms. Itoh



In due time, Tom was Admitted into a local elementary school and was placed in Ms. Ito's 4th grade class.

Tom's lunch



Pupils in this school must bring lunch everyday because there is no school meals. So, Mrs. Jones prepared an American style lunch for her son Tom. In the lunch box, she put a sandwich, chips, cookies, and a soda, which are typical American lunch box items.

Teacher: Bring “Bento”

Teacher



Ms. Itoh

Aya



Tom’s teacher, Ms. Ito, became very anxious about Tom’s lunch and asked Aya to tell Mrs. Jones to prepare Japanese “bento” for Tom instead of an American lunch.

Do you agree with Ms. Itoh?
Talk with your partner.

**Which of the followings best explains
the situation?**

Here is the first question:

Do you agree with Ms. Ito? Why? Why not?

Please talk with your partner and find your own answer.

Next question.

Why did Ms. Ito ask Mrs. Jones to prepare Japanese bento?

Choose the best answer from the four choices.

Why?

- 1 Japanese children will be envious.
- 2 Not nutritious enough
- 3 Against Japanese tradition
- 4 Conformity more than individuality